

■ 「さんぽセル」 論争 ■

「ランドセル症候群」という言葉がある。数年前に、小学生の背負うランドセルが重すぎるとの指摘があり、それによって引き起こされる健康被害をそう呼ぶようになった。原因は脱ゆとりで教科書のページ数が増えたこと。これを解決しようと開発された商品が最近話題になっている。

その名も「さんぽセル」。ランドセルに車輪の付いた2本の棒やベルトなどの部品を取り付けることで、キャリーバッグのように運ぶことができ、小さくすれば装着したまま背負うこともできるという優れもの。まるでランドセルを散歩させているように見えること、母音を踏んでいることから、ネーミングもなかなかである。4月に発売されてから既に、3000台の注文があり、今では3〜4カ月待ちという。

一方で、この商品に対し、ニュースサイトを中心に1000件を超える批判コメントが並んだ。「体のバランスが悪くなり、背骨のゆがみが出ないか心配です」「毎日背負って歩いていると、下半身が鍛えられる。負担だからと、やめてしまうのは、もったいない」など。

これに対し、開発者は、次のように反論した。「それは、重いランドセルでなる“ランドセル症候群”といわれている病気です。それを解決しようとしてるんです。心配する方向が反対です」「もし、灯油缶を遠くに運ぶなら、大人は皆、軟弱にならないよう背負いますか？きつとタイヤで運ぶと思う」。

実は、商品を開発したのは、栃木県に住む小学3〜6年生の兄妹が中心のグループ。「開発した人は子どものことをよく分かってないですね」とのコメントには、「今、小学5年生です。作った時は、4年生です。子どものことをよく分かってなかったら、ごめんなさい」と応じるという落ちまでついた。

論争は、「荷物が多すぎる」といった指摘やランドセル是非論など、様々に飛び火しているが、残念ながら、「重いランドセルをどうするのか？」ということの提案はない。

身近な問題の解決に端を発した小学生たちのチャレンジは、数多くの試作を経て商品化にたどり着く。その間に特許の申請も経験した。そして、怯まずに批判にも立ち向かう。彼らが学んだものは計り知れず、小学生が具体の解決案を出したことは意義深い。

現在、さんぽセル通学を普及させるべく、彼らはクラウドファンディングを行っている。6月11日時点で3000個以上に相当する1000万円以上が寄せられているという。さらに、首相、文科相、市長、校長からも寄付先を募集し、希望しない場合は、小中学生の通学の荷物の重さを現在の半分にしよう解決法を求めている。

一時的な流行で終わるか、はたまたこれからの定番となるか。今後がすごく気になっている。もしかすると将来、キャスターはランドセルの標準装備になっていたりして。